

本年二〇二二年十二月で、日中戦争が世界大戦に拡大して八十年。手紙は時季が外れてますが、戦禍の経験として残して置くべきかと

爽やかな秋の季節となりました。初めてお便りさせて頂きます。

此の度

父 田中重蔵の事で色々御尽力を頂きましてまことにありがとうございます。私は昭和十五年の生まれです。父は、私に名前を付けただけで、生後半月の赤ん坊と一才五ヶ月違いの姉、母を残して出征をしたそうです。

外地（中支）に行く前の僅か二、三日を本籍のあった奈良部隊から休暇が出て横浜の自宅に戻れる事になり、その時家族四人で撮った写真が、親子四人の只一枚残されたものでした。中支に渡った父は本当に筆まめの人で、母、姉、私にと百通を超える絵葉書を送っていました。父にしても姉、私の顔などわからないままなのでしょうが、実に多くの絵葉書を残してくれ、それが私と父につながる形見として、今も大切に持っています。私もまた顔も声もまるで知らない父はとても遠い存在で命日すら忘れてしまっ程です。

それが近年になって見えなかった父が俄かに近寄って来てくれる様に感じます。数年前にはインパールで戦死した父が烈百三十八連隊に所属していた奈良県の戦友会に出席できた事や、宮澤様や佐々木様の御縁で拓殖大学の「招魂祭」にお招き下さる事が本当に嬉しく感激一入でございます。

そしてお送り頂きました「茗荷谷だより」に父の事を書いて掲載して頂いた事、嬉しく涙があふれてきました。

十一月三日には姉と共にお目にかかり招魂祭に列席させて頂きたいと思えます。本当に色々と有難うございます。

深くお礼を申し上げます。

平成二十六年の秋、わが妻の父親の戦死が出身校である拓殖大学に伝わって、同大招魂社に無事納められることになった。ここに至るまでの展開はひとえに知人の機転と偶然に負うもので、実に七十年ぶりの、云わば復学となった。

右は、その手配をして頂いた同大の百年史編纂および戦没者名簿を調べ直す作業をされていた宮澤様あてに差し出された礼状である。（氏は小田原高校から拓殖大学出身、著名なスポーツ記者）

なお、文中にある招魂祭の様子は、この手紙を知ったNHKによって全国放映された。

柳川吉信